

ピアノのお話 IX

19 世紀のロマン派の花盛りの時期はまたピアノ音楽が咲き乱れた時期でもありました。1810 年生まれのショパン、シューマン、1811 年生まれのフランツ・リストは中でも“三羽ガラス”と言って良いでしょう。しかし、職業ピアニストという意味ではシューマンは外れています。彼も一時はピアニストを志したのですが指の故障のため断念することになり、作曲に転向したのです。

残る二人はショパンとリスト——といってもこの二人の芸風は全く異なっていて、これほど対照的な人たちもいないかと思われるほどです。もしリストを鍵盤の王者と呼ぶとしたら、ショパンは“ピアノの詩人”でありましょう。リストは華やかなステージ・ピアニストで、ヨーロッパ中を演奏旅行をして回り、一日に 2 回も 3 回もリサイタルを開くことも平気でしたが、ショパンは体が弱く、そのためステージや演奏旅行よりもパリの貴婦人たちのサロンで名声に包まれておりました。

そのショパンは一時期 George Sand という女流作家と同棲したことがあります。（この名前はジョルジュ・サンドと読まれています。フランス語のジョルジュという名前の綴りは Georges と語尾に S がつきます。S がつかないのはこれが英語のジョージだからです。だから正しくはジョージ・サンドなのです。フランス人なのに英語のペンネームを使ったのは当時のスノビズムです。）彼女は現代の言葉でいうところの“翔んでる女”でありましたから、男装をして葉巻をふかして、自由恋愛論をぶち、また実践しました。彼女の恋人として有名になったのは作家にして詩人のミュッセとピアニストのショパンが双璧でしょう。サンドがショパンと住んだ家はパリのショセ・ダンタン街にあり、今も建物は残っていますが、大きな建物で、何世帯もの人が入居しています。この中にショパンとサンドはそれぞれ別の部屋（家）を借りて住みました。お互いに芸術家ですから（特にショパンはピアノを弾くので）相互に相手の邪魔をしないように、別々の家に住もうというわけですが、その距離は「スーブの冷めないほどの」近さであったわけです。

サンドは裕福な家の生まれで、パリを南へ 300 キロほど下ったノアンという村にシャトー（城館）を持っていました。この彼女の館へ肺の弱いショパンを何度か連れて行っています。館の女主人が帰ってくると召使たちは張り切って働き、料理人たちはパリでは食べられないようなジビエ（野生の鳥獣）を腕によりをかけて料理したりします。このあたりの風景や人情についてはサンドの出世作の一つ《魔の沼》La mare aux diables という“田園小説”（翻訳が出版されています）に描かれています。

館の女主人はパリから連れて行ったゲストの人たちや近郷近在の名士を招いてよく夜会を催しました。

そんなあるとき、特別な夜会がありました。彼女はショパンを同伴していて、この夜は彼に頼んで、夜会の始まりに、特に彼の演奏をご披露してもらったのです。ショパンはサロンの淑女たちの喜ぶノクターンを 2 曲と、エキゾチックな魅力に満ちた“マズルカ”を数曲演奏しました。ノクターンを弾くショパンの優しいタッチは、人々を夢見心地に誘いましたし、小さなマズルカは宝石の輝きで皆を魅了しました。客たちは幸せな陶酔感に浸りました。

さて食事も済み宴も酣になった頃、女主人が人々を驚かせるようなことを言いました。

「皆様、実は今日はもう一人別のピアニストの方がお見えになっています。ご紹介したいのはやまやまですが、余興としてこの方に幕の陰でピアノを演奏して頂きます。それを聴きながら皆様にこのピアノを弾いているのは誰なのか、当てて頂こうというわけです。先にヒントを差し上げますと、その方はとても有名な方で、皆様が名前をご存知の方なんです」

女主人の前置きが終わると、カーテンの陰でピアノが鳴り始めました。

すると、あちこちからどよめきが起きました。「パガニーニじゃないかしら。」そう！弾き始めた曲は、当時天下の人気を独占していたヴァイオリニストのパガニーニの至難の曲といわれる“奇想曲”（カプリッチョ）に違いないませんでした。（この曲集はリストやシューマンの手によって一部がピアノ曲に編曲されていましたが、こ

ちらも演奏至難の曲です)。

カーテンの陰のピアニストは誰なのか。誰がこの“超絶技巧”のような難曲に挑んでいるのか。

華麗な修飾句を鮮やかに弾き分けながら、指は鍵盤を上から下まで駆けめぐっていきます。

「リストだ…」

誰かがひそひそ声で言うと、すぐに反応が広がりました。「そうだ、リストだ…」難曲をこのように楽々と弾きこなすピアニスト。それはリスト以外に考えられませんでした。

(つづく)

執筆／石井宏（音楽評論家）

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

ピアノでみんながひとつになる。美味しく！楽しく！1日中ピアノに浸る音楽フェス！！

ジャコバン国際ピアノ音楽祭 2019 in 岐阜

チケット
発売中

2019. 5/19 日

マチネ・コンサート

開場 13:00 開演 13:30

【料金】全席指定 1,500円 [サラマンカメイト 1,350円]

I. 13:30 ~ 14:30 パリのピアノスケッチ

【出演】三浦友理枝

【曲目】ドビュッシー：亜麻色の髪の乙女、月の光 ほか



©Yuriko Miyazaki

II. 15:00 ~ 16:00 ジャズ de シャンソン

【出演】フィリップ・レオジェ

【曲目】ルイギ：バラ色の人生、ベティ：セ・シ・ボン
ブルレ：行かないで ほか



ソワレ・コンサート

開場 16:20 開演 16:40

【料金】全席指定 2,000円 [サラマンカメイト 1,800円]

I. 16:40 ~ 17:40

いまもっとも期待を集めるフランスの新星

【出演】セリア・オネト・ベンザード

【曲目】バーンスタイン：ウェスト・サイド・ストーリーより
ショパン：ピアノ・ソナタ第2番 ほか



©Natalia Gómez Colard

II. 18:40 ~ 19:40 2台ピアノで聴くシンフォニー

【出演】近藤嘉宏、高橋多佳子

【曲目】
ブラームス：交響曲第4番 短調 Op.98
(2台ピアノ版) ほか



©Akira Muto

新・首席指揮者とバッハ演奏のスペシャリストが奏でる

鈴木優人&バッハ・コレギウム・ジャパン

～バッハ・チェンバロ協奏曲演奏会～

2019. 7/21 日 16:00 開演 [15:30 開場]

チケット

全席指定 S 4,000円 A 2,000円

[サラマンカメイト S 3,600円 A 1,800円]

※学生半額 (30歳まで)

チケット
発売中

出演

指揮・チェンバロ・オルガン／鈴木優人
ヴァイオリン／若松夏美
リコーダー／アンドレアス・ペーレン
器楽／バッハ・コレギウム・ジャパン

プログラム

J.S. バッハ：チェンバロ協奏曲

第3番 二長調 BWV1054 第4番 イ長調 BWV1055
第6番 ヘ長調 BWV1057 第7番 ト短調 BWV1058 ほか
※曲目は変更になる場合がございます。



©Marco Borggreve

